

SATだより特別号

副島茂専務理事追悼

美瑛から十勝連峰を臨む

2000年7月



財団法人東京都スキー連盟専務理事
 財団法人全日本スキー連盟評議員
 財団法人東京都体育協会評議員
 財団法人全日本スキー連盟指導員
 財団法人全日本スキー連盟A級検定員
 財団法人全日本スキー連盟ブロック技術員

主な経歴

- 1947年 5月5日 北海道美瑛に生まれる
- 1967年 第45回全日本スキー選手権大会(八方尾根) 滑降・回転競技出場(山梨学院大学)
- 1967年 第22回国体冬季大会スキー(青森県大鰐) 大回転競技成年部出場(山梨県代表)
- 1968年 第23回国体冬季大会スキー(長野県白馬) 大回転競技成年部出場(山梨県代表)
- 1969年 第24回国体冬季大会スキー(岐阜県流葉) 大回転競技成年部出場(山梨県代表)
- 1970年 第25回国体冬季大会スキー(北海道倶知安) 大回転競技成年部出場(山梨県代表)
- 1970年 第48回全日本スキー選手権大会(北海道恵庭) 滑降競技出場(山梨学院大学)
- 1970年 第48回全日本スキー選手権大会(北海道手稲) 大回転・回転競技出場(山梨学院大学)
- 1976年 準指導員取得
- 1979年 指導員取得
- 1981年～1998年 財団法人東京都スキー連盟教育本部専門委員
財団法人全日本スキー連盟ブロック技術員
- 1995年～1998年 財団法人東京都スキー連盟評議員
- 1998年 財団法人東京都スキー連盟教育本部理事就任
- 2000年 財団法人東京都スキー連盟専務理事就任



追悼

財団法人東京都スキー連盟会長 谷 雅雄

副島さんは、昭和五十六年財団法人東京都スキー連盟教育本部専門委員を始めとし、平成十年秋(平成十一年度)には本連盟の理事に選出され、平成十一年(平成十二年度)の秋からは専務理事として重責を担っておいりました。

特に、専務理事としてその功績は大変大きく、平成十一年度後半から予算編成委員会のメンバーとして、その後は専務理事として連盟財政の建て直し、各本部間の調整と連盟のスムーズな運営に見られるように大きな手腕を発揮しておりました。

連盟運営に当っては、前例を踏襲することなく、各本部を見渡し、連盟全体としては、との考えの下、温かなコミュニケーションと優しさを持った対応で仕事をされておりました。

会員、役員、事務局職員、専門委員達との会話では、話術と機転の速さ、更には歌の上手さと歌声の良さは自他共に認めるところでありました。「副島です」の自己紹介から始まり、「上海帰りのリル」から止め処なく始まるカラオケは忘れることが出来ません。

私と副島さんとの直接の出会いはいは、今から七・八年前だったと記憶しています。

人を介して面談したいとの話があり飯田橋の飲食店で会い、連盟についての話しをしたことでした。教育本部に副島茂という男が存在していることは承知していましたが、それまで直接にじっくり話したことはなく、どんな男か興味を持って話をしました。響きの良い低音で、ゆっくりとした穏やかな話し振りの中に芯の強さを感じたのを今でもはつきりと覚えています。

その後、理事として一緒に仕事をすることになり、当初は教育本部と競

技本部の理事としての立場であり、連盟全体の話をするということはあまり多くはありませんでしたが、お互い代表理事と専務理事、会長と専務理事という立場となつてからは、連盟が置かれている状況、そして将来の連盟のあり方、連盟財政のこと、各本部・事務局運営、SAJ・関係団体など多岐に渡る話が多くなつて行きました。

私の感じるところ、専務理事就任当初は教育本部の理事としての執行に思いが残っていたのか、多少なりとも葛藤があつたのではないかなと思つておりました。

しかし、一シーズンを経過した頃からの副島さんは、真の専務理事として専務職に徹するようになって行きました。何か一歩強く踏み出したのを強く感じました。

それと同じくするように、連盟財政は安定化方向へ動き出し、その他の連盟業務のスムーズさが加速し改善されて行きました。

平成十一年の秋から平成十五年の春までの足掛け五年間に渡り、専務理事副島茂は成果と結果を残し、将来への道筋を残しました。

副島茂として、専務理事として真摯なサポートに感謝します。有難うございました。そしてお疲れ様でした。

これからも副島さんの遺志を受け継ぎ、連盟・スキー界の発展に努めて行く所存です。

ここに謹んで哀悼の意を表し心からご冥福をお祈りいたします。



副島茂さんを偲んで

財団法人全日本スキー連盟専務理事 丸山 庄司

副島茂さんの訃報を聞いたときは耳をうたがいました。あの頑強な身体、まだ若い、あの副島さんが病には克てなかったと聞き、私は入院されたのも知らなかっただけに信じられずショックでした。

副島さんのお付き合いは浅く、平成十一年の秋渡辺茂さんから谷雅雄さんと共に紹介いただいたのが初対面でした。その後SAJの評議員になられ翌年春の評議員会から谷さんと出席されお付き合いが始まりました。評議員会では質問をいただき、スキー指導員六五〇〇余名という大世帯をかかえる東京都連主管の研修会運営の困難さと、その研修会の重要さを切々と話されました。

スキー活性化の為に、SAJも加盟団体が活動しやすい方策を取るようにとのご意見と記憶しています。SAJ教育本部も年々巨大化する組織に対して、特にシーズンインの一ヶ月の日程調整に悩んでいた時でした。

これがキッカケとなって、中央研修会の日程やオフィシャルブックの発行を早めたり、また、今年からは中央研修会をブロック別開催にするなど内容充実も含め改変されました。

その後は勿論ですが、菅平や長野市などあちこちでお会いする機会が多くなりました。いつもスキーのこと組織のことなど、淡々と、熱っぽく話されたことが想い出されます。

昨年の平成十四年二月、妙高高原スキー国体の時でした。谷さんと東京都の応援に来たと夜遅く宿にわざわざ訪ねてくれました。それも新潟の地酒を持参で。同室の瀬尾洋さんと四人で当然のごとく酒盛りとなりました。この夜は硬い話ばかりでなく、なごやかな中に話も盃の交換もはずみ、別れたのは午前一時を廻った程で楽しいひとときを過ごしたことも想い出の一つです。

最初に述べたように副島さんのお付き合いは短いものでしたが、それを

上廻る「太い」ものでした。谷会長と副島専務理事は絶妙のコンビで、東京都連は活発に活動していました。副島さんは、相手の気持ちの分かる組織を大切にする人でした。都連の専務理事として、SAJ評議員として、もつと、もつと活躍してほしかった。惜しい人を失いました。私は副島さんが遺されたものを無駄にしてはいけなと思っています。

ここに、謹んで哀悼の意を表し、ご冥福をお祈りいたします。

追悼

千葉県スキー連盟会長 前田 忠男

訃報をお聞きしました時は、あまりにも突然のことで言葉を失いました。永年スキー界発展のために尽くされ、多くの方の期待を担われて、都連の要である専務理事に就任され、意欲的に取り組まれておられていただけに、谷会長はじめ都連の皆様の哀惜の念は、いかばかりかと思えますし、私たちも残念でなりません。

南関東ブロックの進め方について、熱っぽく話しておられたことが今更ながら思い出されます。

スキー界の活性化のために、副島さんの情熱と指導力が、今こそ必要な時、私達の願いも空しく、あまりにも早く駆けぬけていってしまったという思いを強くします。

副島さんの遺志を引き継いでいくことが、残された私達に与えられた務めだと思えます。

ご功績を称え、心からご冥福をお祈り申し上げます。

故・副島茂氏を偲ぶ

東京都スキー指導員会会長 阿部 雄三

去る三月二十七日、急逝されたとの報に只々啞然といたしました。昨年八月頃に体調がすぐれず入院をしておられるとお聞きしておりました。恰度、本会の新年度の運営につき、当方よりご自宅の方へ度々お電話を申し上げておりましたが、何時も変らぬお声で適切なご指導を頂いておりました。

氏とのお付き合いは長くS A T教育本部専門委員としてご活躍されておられました。当時から、本会が主催実施しておりました、指導員検定受験者を対象に雪上の特別技術研究会の講師の依頼を申し上げ、ご理解を頂き、選任して頂いておりました。その後S A T理事として執行部となられ専務理事また各本部長を兼任されその重責を担い、スキー界振興に並々ならぬご苦勞をなさっておられました。

月に二〜三回程度のお電話を申し上げ種々ご指導を頂きながら、最後の電話となりましたのは、今年度の準指導員検定合格者発表会場での当会よりのP Rについての要件でありました。お話しも苦痛のようでしたがご諒解を得て、今暫らくF A X通信でのご指示も受けておりました。

今想い出すのは何時も明るく対応して頂いた容姿が脳裏にうかびます。今では突然帰らぬ旅に立たれてしまわれた。残念でなりません、どうか安らかにお眠り下さい。今までご指導を頂いた数多くの教訓を私共資格者の組織として、スキー界発展の為努力して参りますのが、ご恩に報いるただ一つの道であると信じております。

心からご冥福をお祈り申し上げ、ペンを置きます。

笑顔の似合った副島専務 安らかに

菅平高原観光協会理事長 小島 好憲

ここに平成十三年度のスキー場開き芳名簿帳が有り、そこに副島さんの毛筆のサインがあります。

会場に來られた時、「元氣そうですね」と尋ねましたところ「少しやせたが、調子良いよ」と応えられ、いつもの笑顔を中心に振りまいていました。よく会議等でお話する時は、スキー連盟専務としての立場で、色々こちらの足りない所などご教授下さいましたが、白樺荘などでたまたま会ったときは個人的な話に花が咲き、清酒の一升瓶がレストランのテーブルの上に並び始めると、お互いに絶好調で、私は冷やで副島さんは熱燗でとことん飲んだ事を覚えています。

いつも堂々としておられ、常に未来を見据えておられたあの副島さんが亡くなられたとの一報を頂いた時。ご家族に同僚に又多くの後輩に言っておきたかったこと、してあげたかったこと。それらを残して逝かれたんだらうなという想いが心をよぎり、暗澹たる気持ちになりました。

ご家族の皆様にはあまりに失ったものが大きく、慰めの言葉も見つかりませんが、私の脳裏に浮かぶ副島さんはいつも笑顔で、はつらつとしておられますので、ご家族のことを一番心配されて逝かれた副島さんの心をお察し致しますと、せんえつながら皆様の笑顔が一番のご供養になるのではと想ってやみません。

菅平高原もひとかたならぬお世話になり、言葉では言い尽くせないものが有ります。

我々も副島さんの言葉・行いを手本とし、東京都スキー連盟の皆様にも少しでも喜んで頂けるスキー場作りに励むことが一番の供養かと思えますので、このことを御霊に誓い、追悼の意を表させて頂きます。

副島茂専務理事を偲いで

白銀スキークラブ会長 岡田 邦彦

東京都スキー連盟 副島茂専務理事は、平成十五年三月二十七日に逝去されました(享年五十五才)。葬儀はスキー関係者の方々を含め、各界から多数の参列下、三月三十一日江古田斎場で盛大に執り行われました。副島氏は北海道美瑛の出身で、学生時代(昭和四十一年)山梨学院大学スキー部を創設して、スキー部に籍を置き国体に出場、卒業後社会人となっても、スキーから離れられず、白銀スキークラブに所属し、クラブ指導者として後輩の育成に力を注ぎ、指導員ゼロのクラブを指導員、準指導員合わせて二十数名を在する。連盟の中堅クラブに育てました。

副島氏のスキーに対する情熱と先見性、実行力がクラブだけではなく、広くスキー界に貢献をするべきと言うことで、平成十年に東京都スキー連盟理事。同年全日本スキー連盟評議員。その後、専務理事に平成十二年から就任しました。東京都スキー連盟発展に、熱い情愛をこめて、遺憾なく副島氏の持ち味を発揮してきた矢先に、突然彼を襲った病魔には勝てず亡くなったことは、東京都スキー連盟にとつて、かけがえのない人材を失い、又我が白銀スキークラブにとつても大きな損失であります。

副島氏の面影を追いながら、氏の偉業に心から敬意と感謝の意を表し、ご冥福をお祈り致します。



痛恨 副さん逝く

財団法人東京都スキー連盟総務本部長 柴田 博

昨年(平成十四年)秋口に、副さんから「検査のため入院するから、その期間中総務関係をいろいろ頼むよ。一ヶ月か一ヶ月半位と思うから。」といつていたことが未だに、聞こえて来るような気がしています。

副さんとの出会いは、副さんが教育本部理事として活躍していた平成十年当時でした。この時期は、将来の連盟はどうあるべきか、各本部間の垣根を払拭し、チームプレイと言つことを熱く語っていました。

議論をするというより、一方的に教えてもらっていたような日々であり、口調や仕草は今でも鮮明に残っています。話しをすることによって、心情を吐露し、より親近感を覚えていったものです。特に、連盟のあり方に対しては信念をもっていました。

平成十五年三月二十七日午前十一時四十分頃、谷会長から「副さんが、危篤状態に」との一報があったとき「副さんに限ってそんなことはないよ」と思いましたが、やはり心配になり午後一時三十分頃病院へ駆け付けました。御茶ノ水の駅前で、谷会長と会いました。会長は、それまで病院にいて副さんの「症状は、小康状態であり、比較的安定している」とのコメントがあり比較的安心をしていました。

その後、病室へ入り副さんと面会し、何回も呼び掛けをしましたが、返事が出来るような状態ではありませんでした。

そして、午後三時すぎに帰らぬ人となってしまいました。

昨今のスポーツ業界は、スキーに限らず人口そのものが右肩下りの傾向にあります。都連にとつてもこのような傾向を受けています。私たちがスキーを愛するものが、後世に何を残せるのか真剣に考えて行かなければならない時代に入ってきました。大きく時代が変わろうとしているとき、副さんの存在価値がまたクローズアップされてくるのかもしれない。副さんでも、副さん 頑張ってみよう。

断腸の想いをこめて 合 掌

追悼

財団法人東京都スキー連盟教育本部理事 増田千春

一九八五年三月末の閑散とした菅平でGメダリストのグスタホ・トエニを迎えて都連専門委員のキャンプが行われた。スーパースターの技法を有志十数人程の実費負担で実現した二日間の合宿だった。当時、研修会やスキー学校の情報しかなかった我々にとって、スキーを自分の履物同様に自在に操る滑りや、すべてポールをセットして上達させていく指導法はなんとも新鮮なショックを与えたものだった。そして、これを機に、専門員がテクニカルキャンプを独自に企画し、トップスキーヤーに直接手ほどきを受けれることで自分たちの技術を高めていく機運が、後に都連の主要な運営を行うスタッフとして成長していった。

このキャンプに参加していた副島さんも「自分のスキーへの欲求の充足」に燃えていたひとりだった。上体を起こし、足首のブロックを利かせ重心をガンガン落とし込んでいく重厚な滑りが今でも強く印象に残っている。仲間づくりや人まとめが上手で、しばしば陥る険悪な議論も軽快なジョークで瞬時に場を和ませる才能は、都連の専務理事として大きな期待がかけられていた。専務就任後も行事では寸暇を惜しんで滑りまくる人で昨年暮れの北海道での専門委員研修会でも、いつものあの重厚な滑りで貪欲に滑りまくっていた。そして二月末お会いした折にも指向別研修会の仕上げを熱く語った副島さんは、やはりどこまでも「スキーが大好き」なスキーヤーであった。もっとたくさん滑りたかっただろうし、そしてもっと巧く滑りたかったと思う。

指導現場の欲求や都連の抱える諸問題に尽力されたスキーヤー副島さんは、瞬く間に都連を駆け抜けていってしまった。

副島茂氏を偲んで

財団法人東京都スキー連盟競技本部長 杉崎寿三男

去る六月二十八日(財)全日本スキー連盟の平成十五年度春季定例評議員会々場に於いて、開会に先だち司会者池上総務本部長より故人となられた副島茂氏の報告があり、伊藤副会長より哀悼の意を表して全員で黙祷が捧げられました。

昨年はこの会場で元気に活躍をしていたのに、惜しい男をこの世から亡くしたものと改めて無念を感じました。

ソエさんと私はスキーを通じて長いおつきあいがあり、特に亡くなられた直前は都連での役職上も常に一緒に行動が多く飲むチャンスも多々ありました。

病も一時は完治したと言われ、人生の充実期とも思わせる程の張り切り様で昨年の暮は北海道の朝里川ではスキーも一緒に滑りました。スキー場で会ったのはそれが最後となりました。

それから間もなく、突然急変し、あまりにも呆気のない実態となつてしまいました。

ソエさんはどなたもご存知の様に人を憎まず、何ごとも前向きに良い方向を目指し円満な性格でした。全てが「お友達」と言うおつき合いが得意の台詞でした。その証拠にソエさんの周囲は常に大きな笑い声が充満していた事が今でも浮かんできます。

ソエさんから酒場で手ほどきを受けた「上海帰りのリル」も練習を重ねた結果完成に近づいて来ています。いづれ一緒に滑る日もあります。その時は熱燗で一曲行きましょう。 合掌

副島さんを偲んで

財団法人東京都スキー連盟評議員 福野寿史

東京都スキー連盟の副島専務理事が、三月二十七日永眠され、三十日の通夜につづいて三十一日、告別式が江古田斎場にて、しめやかに執り行われました。

あなたは、なぜ、こんなに早く、この世をさらなければならなかったのでしょうか。

あれほどスキーを愛し、指導者として我々を引っばってくれたバイタリティーをもう感じる事ができなくなってしまったのですね。私と副島さんとの出会いは、東京都スキー指導員会の行事でした。一九

九四年(平成六年)に梅池高原スキー場で開催されました「指導員受検のための特別研究会」に講師として参加していただいた折、私は「特研」の幹事役でした。当時、副島さんは東京都スキー連盟の教育部専門委員として活躍されているときでもあり、そのなかでも中心的役割をこなしていた時期でもありました。スキーを愛する心を熱くかたり、誰にでも隔てなく自分の気持ちをぶつける。私との年齢差も殆んどなかった彼と意気投合するには時間などかかりませんでした。

翌年(平成七年)には、「特研」が尾瀬岩倉スキー場で開催されたのですが、勿論、講師に副島さんの名前を入れることを忘れませんでした。梅池での評判も上々だったこともあり、この年の「特研」への参加者は多数と記憶しております。

それ以来、スキーに関する事、人生に関する事、何かにつけ、何でも相談しあえる良き友人としてお付き合いをさせていただきました。

そんな彼から、昨年八月、突然の連絡をもらいました。

「病気に負けるものか」、力強いメッセージがありました。

入院中のあなたは普段と変わらない元気いっぱい笑顔でした。そして、一〇月にも元気いっばいの連絡をいただき、快気祝いまで……。

年が明けて、一月には再入院の報に愕然としましたが、なぜ、こんなに

早く。

都連の将来を考え、執行体制の充実を図ってきた副島さんの志半ばでの逝去はスキー界にとつても大きな痛手であることは確かですが、彼にとつても、さぞ悔やまれることではなかったのかと残念でなりません。

彼の志を担い、理事そして我々評議員が真剣に都連の運営と執行体制を考えて行かなければならないと感じる次第です。

ここに、心からご冥福をお祈りいたします。

惜別

財団法人東京都スキー連盟 専務理事 故副島茂君を送る。

スキーを愛好する仲間の一人

財団法人東京都スキー連盟前監事 山崎昌矩

ゆくりなき利那の邂逅が人世を決める。東西南北、君とは生れも育ちも違うと思っていた。

それが、故郷を極北の大地、北海道と同じくしたことを知った。君は、石狩川の支流美瑛川で、我は道東の釧路川、清冽な雪解の水で、揺籃の産湯に浸った。

育ちは違っていたが、雪を友とし、スキーを愛する仲間になつてからは、そうではなかった。

春夏秋冬、櫛風沐雨、時空を超えてお互いに、いい仲間だった。会えば好し、置酒高会して、その時の君は人なつこい笑顔と、その高声は、一座のTACTであった。

また、君の言葉は皆を説得させるものであり、香辛料でもあった。訣れるも好し、尽ざる名残りを抱きながらも、やがて来る再開の期待を当然のこととして、かたみに明日への手を振ったのだ。だが、今は違つ。

君は、彷彿として天空の位置角に去り、我は、愁然として地の一隅に佇む。

輪廻転生、露の如し。君は、今、玉楼の中に在る。

君は、敬愛し、また君が哀惜した多くの誰れ、彼と、愉快に交歓しつつ、哀別離苦の人の世を、遙か天空から見詰めているだろうと。

君とは、時を同じくして、財団法人東京都スキー連盟の管理運営を司ぐる役員に選任された。

君は、類い稀な、資質を生されるべく専務理事の要職を委ねられた。

我は、適材適所と、本連盟において、稀にみる逸材の就任であると思つた。

君は、連盟の基本規則である寄附行為の定めと趣旨を勉強したい。付き合つて呉れるかと我に問う。

過去の忌まわしい組織の混乱は、当時の極く一部の理事と評議員が、基本規則である寄附行為の定めと、趣旨に、全くの不勉強、無理解であつた。

起因は、そこに在るといふ。君は、それを見抜いていた。

寄附行為の定めと、趣旨をできる限り正しく、自分の理解の根拠に据え、伝統ある連盟の運営に努めたいという。時として、相方、時間を得て、君と我れの二人だけでの勉強の会合は、延拾数日になつただろうか。

お互い一つ、一つ、納得できるまで、忌憚のない論議、その論議の終りに待つ、一杯の美酒に、疲労回復を託し、論議を楽しむ糧とした。我もまた、至らざるを補う。その至福の友情が嬉しかった。

唯、単に、美酒を汲み交わす仲間としてではなく、限りなくスキー

を愛好する多くの仲間達のために、健全な組織たるべき共通の理念、公平な思考を同じくする君との、絆が生れ、それを実感できたことが嬉しかったのだ。

君と信頼し合えた友情は、終生忘却することはない。有難う。——と云う言葉が、惜別として、我が胸の中に湧き出する。それが悲しい。

君が、谷会長と二人三脚で、人知れず、苦痛と、苦悩の中で蒔いた種子は、やがて若い理事達によつて育ぐまれる。安心し期待している。見守つていて呉れたまえ。

いづれ、我も、君との会合、その終焉の旅立ちを迎える。故郷の屋根、大雪山系の主峰旭岳、かの泥流コースを一緒に滑り楽しみたい。あそこの粉雪は、世界一だと語り合つた。そのために取つて置いて呉れ給え。

君が最愛の伴侶とした明子さんと共に慈しみ、立派な社会人に育ぐくんだ子息に、明子さんの今後を託した。

後顧を託した子息は、立派に君の遺志を継ぐ、見守り続けていて欲しいと願う。

そのことのみを、君に伏して乞うのみである。君との高誼の感慨、寂しく天空を迎え、君との尽きぬ惜別を嘆く、これ以上書き連ねることとは止めた。

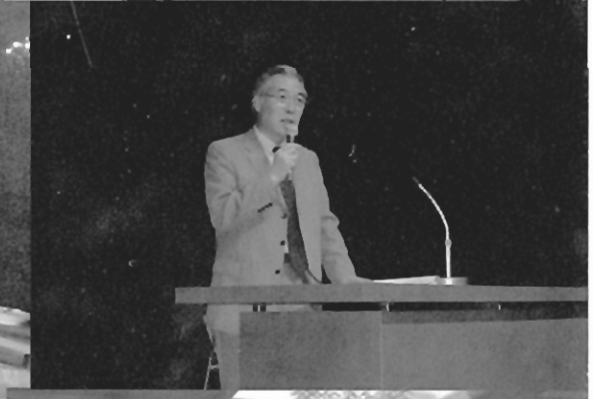
我が、常々愛唱する島崎藤村の作詩、「惜別」の詩の一節を歌つて君を送ろう。

「別れといえは昔より、この人の世の常なるを、流れる水を眺むれば、夢はづかしき涙かな。」

編集後記

多くの方々から追悼文が寄せられました。これもひとえに副島専務の人格に寄ることが大きいと思われまふ。これからと云う時の急逝は都連にとつても大変な痛手ですが、今後もその意志を継いで努めていきたいと思ひます。

こゝ冥福をお祈りします。



都連での活躍



88年十勝にて家族とともに



99年富良野



91年カダブラコムスキー場



99年富良野 クラブ員と

お
も



00年蔵王



91年カダウイスラスキー場



02年愛犬クラブと

い
で



01年オーストリアスキー連盟とSAJのパーティー



01年ジャンプの舟木選手と

花トシネル 妻に抱かれて 茂逝く
 桜花乱満 これ葬送の 花宴
 この 柩 花一杯 あふれけり
 葬送に 桜花をばら 静かに舞う
 太く短かく 茂の人生 輝けり
 今頃は 温かい母をんの ふところに
 おい 宗聡 必ず俺れを 越えてくれ
 明子存りて 茂存りたる 夫婦路
 この人生 最後もなれば すべてよし
 早くにも あの天国で 初まへり

平成十五年四月四日
 たきお 今季書

実兄 齋藤龍夫氏書

